

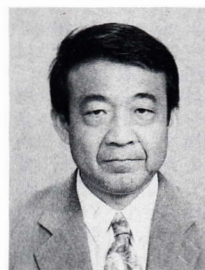
茨木高校野球部

OB会報

発行

大阪府立茨木高校
野球部OB会

大いなる志をもつて！

吉田 俊彦
(高18回)

なく思っております。

その頃、春の府大会ベスト8のチームに勝ったり、また甲子園にもたびたび顔を出していた強豪興国高校との公式戦では、二線級を出してきた興国高校を追い詰め、最後にはエースを引っ張り出した程、実力的にはかなりのものでした。

練習で印象に残っていることは、

私達(高18)にとつての思い出は何といつても三年生の夏のノーヒットノーランです。夏の大会一回戦対太成高校に6-0でやられました。その相手のピッチャーは、次の試合でも延長に入つて点を取られるまでノーヒットノーランを演じたと聞きました。何も、いきなりこんなすごい奴とあたらなくとも、とクジ運の悪さを恨んだものでした。

当時、野球部長は福留先生、監督は田中先輩(高15)のもとで鍛えていただきました。また夏の大会直前には、諸先輩が集まると必ず話題に出るあの米沢先輩や、多くの先輩方に鍛えていただいたのに、実力が発揮できず誠に申し訳

と当時のメンバーに聞くと、答えは一つ、新チーム結成の夏の特訓と答えます。時間は一時から三時までの最も暑い時間帯の七日間が設定されていました。練習はまずグラウンド十周から始まります。ただの十周ではなく、福留先生の笛に合わせて、ピッチとなればダッシュ、次のピッチでスピードを落とし、次には太腿を高く上げてのダッシュとこのくり返して十周するものです。これを確か、インターバルと呼んでいたと思いますが、これではほとんど汗が絞りますが、これでギイを使い果たします。第二段階は柔軟体操、腕立伏せ、うさぎ跳び、腹筋運動と続き、第三段階へ。第三段階は、ダッシュです。堤防

からグラウンドに下ってくる車輛用の小さい坂に向かって手前からダッシュ、それを二十五回、二人一組になって競争します。坂になっているところに、手すりのような板があつてそこに小石が二十五個置いてあり、一回終わる毎に一個ずつ、石が減っていきます。その石が減っていくのがどんなにうれしかったか、全員の視線は石だけに注がれていました。しかし、誰か一人でも力を抜いて走ると、石が増えています。そのときは、もう先生の顔が鬼に見えたものでした。最後の段階でやっとボールを握らせてもらつて、キャッチボール。ところが、体にはエネルギーが残っていません。立っているだけでやつという状態なので、小手先だけではボールが届きませんでした。このとき、初めて全身を使ってボールを投げるという感覚を身につけたように思います。以上のような、この七日間の練習は自分にとっては、ほんとうに厳しいものでした。こんな厳しい練習(もちろん、諸先輩方の練習とは比較になりませんが)に耐えたのにもかかわらず、最悪の結果で三年間を終えることとなりました。

私達の時代は、甲子園は遙か遠くであり、本気で甲子園を目指していたのかと問われれば、否、ということになりました。すでに志の点で負けていた、ということでしょう。現実を見てできそうな範囲において、志を持つ、そんな小さなところに陥つていたと思われれます。そんな夢みたいなこと言つて、というまわりの言葉に怯えていたのかも知れません。体力、素質、技術どれをとつても劣る私達がそれをね返すぐらいの志を持ち得なかったことこそが、今から思えば大きな後悔です。

現役諸君へ是非共、お伝えしたいことがあります。どう考えたつて甲子園なんか、という心の底の方に流れるあきらめを捨て、諸先輩方が本気で目指されていた、いざ、甲子園へ！という大いなる志を引き継ぎ、その志を伝統にしたいだきたいと思えます。その志は必ず実現すると信じております。最後になりましたが、苦勞を共にしたメンバーのうち高17回・19

回をご紹介させていただきます。

大西 保先輩(捕手)、
泉 勇策君(外野手)、
木村 喜昭君(一塁手)、
倉持 順市君(遊撃手)、
前田 俊彦君(外野手)、
宮武 忠司君(二塁手)、
林原 純生君(捕手)、
マナージャーの

長手(万成) 智恵子さん、
市川(福井) 聡子さん(故人)、
徳永 大輔君、
中林(森脇) 加代子さん、
以上でございます。

今回は、神戸会長の御指名により、お断わりもできず、若輩である私が寄稿文をお引き受けさせていただきます。大いなる志が実現することを祈つて締めといたします。有難うございました。

現役大会前激励会

(1) 日時 6月29日(土)午後6時より
(2) 場所 茨木高校久敬会館

